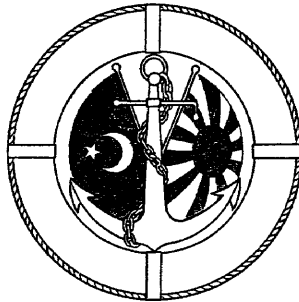


念記の久永善親土日

艦軍國其耳土

號ルルグトルエ



館使大國其耳土日駐

行刊年二十和昭

目次

第一章 土耳其軍艦エルトグルル號遭難記

一、エルトグルル號の日本派遣	一
二、エルトグルル號の歸還	四
三、歸還の季節と航程	五
四、エルトグルル號の遭難	六
五、大島村民の義舉	三
六、生存者の送還	四
七、樫野崎の遺跡	一九

第二章 墳域の改修

一、大阪日土貿易協會の企圖	三
---------------	---

二、追悼祭式典……………	三三
三、墳域の改修……………	三六
四、聖上陛下の行幸……………	三七

第三章 弔魂碑の建立

一、土耳其共和國政府の建碑決定……………	三九
二、弔魂碑定礎式……………	三〇
三、弔魂碑の建立工事……………	三七
四、弔魂碑除幕式……………	三九

第四章 靈地に關する記録、寫眞集

参 考 資 料

- 一、土耳其共和國國防省海軍記錄所文獻
- 二、財團 日土貿易協會「土耳其軍艦 遭難追悼記」
法人 エルトグルル
- 三、The Japan Weekly Mail-27th September 1890
- 四、土耳其共和國政府建立エルトグルル號弔魂碑定礎式竝に除幕式に關する挨拶、祭文及新聞記事（自昭和十一年至昭和十二年）

第一章 土耳其軍艦エルトグルル號遭難記

一、エルトグルル號の日本派遣

明治廿二年オスマン帝國皇帝アブデュル・ハミット二世はオスマン提督を特派使節として日本帝國に遣はし、明治天皇陛下に土耳其國最高勳章を捧呈せしめた。茲に同提督はその使命を帯び、巡洋艦エルトグルル號に搭乘してイスタンブルを抜錨した。抑々この土耳其軍艦は一八六一年イスタンブル造船所に於て建造せられたもので、その性能は左の如くであつた。

長	さ	五〇×二五呎
深	さ	二五・六呎
吃	水	二〇・六呎
排	水	量 二、三四四噸
馬	力	六〇〇馬力
石	炭	積 量 三五〇噸
速	力	一〇浬

裝

備

十五種砲 八門

一五〇アームストロング砲 五門

その他

エルトグルル號の乗組員數は士官及び海軍囑託六十一名、下士官及び水兵五百四十八名、合計六百九名であつた。尙この乗組員中には同年兵學校を卒業した少尉候補生十三名を算した。士官の内譯は甲板部員廿六名、機關部員十二名、造船技師一名、軍醫一名、陸士勤務員一名、樂長一名の他、技術官の五名であつた。

オスマン提督は露土戰爭當時ブレヅナ要塞を死守せる有名なオスマン將軍の令孫で、優秀な海軍士官であつた。イスタンブルを出發の際には大佐であつたが、シンガポールに到着した際海軍少將に進級したのである。

當時、土耳其國の版圖は亞歐兩大陸に跨がり、バルカン諸邦を威壓して國力隆盛であつた。他方、帝國日本は内に鬱然たる明治新興の活力を藏し、外に向つて進出の方針に出でんとせる折柄であつたので、茲に土耳其國は使節を派遣して遙かに交りを日本に求め以て兩國親善の基礎を築かんと欲したのであつた。

さてエルトグルル號は明治廿二年七月卅一日スエズ運河を通過し、翌廿三年一月廿日シンガポール

を経て、同年六月七日横濱に到着した。

エルトグルル號はその航海中、寄港地到るところに於て異常なる感激を與へた。殊に四百年來土耳其軍艦の姿を見ざるアデン海岸では、かのピリ、ムラット、スレイマン諸提督の赫々たる過去をさながら偲ばしむる本艦の圖らざる來航を歡呼を以て迎へんとする群集で立錐の地もない程であつた。又印度の諸港に着けば、忽ち數千の輕舟に包圍される有様であつた。横濱入港の光景は更に華々しきものがあつた。殷々たる禮砲の轟きは、土耳其國旗を仰ぎ見た日本國民の萬歳の聲に和して天を搖がせ、地も打震ふばかりであつた。

かくて、一行上陸するや、使節は 明治天皇陛下より拜謁を賜つた。茲にオスマン提督はアブデュル・ハミット二世より贈られたる土耳其國最高勳章を恭しく 天皇陛下に捧呈、且諸種の御贈品を獻上し、併せて土耳其國よりの使命を奏上し奉つた。

畏くも 明治天皇陛下には一行に殊遇を賜ひ、使節に勳章を授け、饗宴を賜つた。かくて、エルトグルル號將士は東京に滞留すること三箇月、その間日本帝國の國賓として、朝野を擧げての熱誠なる歡迎をうけたのである。

一、 エルトグルル號の歸還

エルトグルル號は、明治廿三年九月十四日日曜午後一時横濱を發し、イスタンブルへの歸路についた。

日本國 天皇陛下に初めて敬意を表し奉るため、海路遙かに訪れ來つた土耳其國海軍將士に對する全日本國民の熱誠なる歡待に、エルトグルル號乗組員一同は感佩措く能はず、それに鼓舞され長き歸航を控へて元氣旺盛であつた。

然るに日本當局は卅年以前の建造にかかる木造艦エルトグルル號のことなれば徹底的なる修理の上、歸路につくことを切に提督に勧めたのであるが、彼は本國政府よりの出發命令を遵守し、自己の勇斷と手腕に信頼して出發を斷行したのである。

三、歸還の季節と航路（附圖其一）

エルトグルル號歸還の季節は、時恰も極東に於ける颱風と雨季に當る九月であつた。いはゆる二十日と二十廿日の厄日とに相當する九月中旬の頃である。この颱風は、赤道地帯から北に向つて突進し、海陸を通過するにあたつて種々の災害をもたらすことを常とする。かくの如き季節に太平洋の狂暴な怒濤の攻撃の目標になる本州の東海岸には岩礁多く避難港の少ない地帯なのである。この沿岸地帯で最も危険な荒海は熊野灘であつて、紀州半島の東南兩面を圍んでるのである。この半島の南方に大島と呼ぶ一島嶼がある。東西一里、南北半里、周圍凡そ四里、形、臥牛に似て山岳起伏し、山は皆岩骨にして松衣、蒼翠海波に掩映して、風景さながら描けるが如くである。

この島嶼の東端に檜野崎と呼ぶ岬があつて、その一角に燈臺がある。檜野崎燈臺は燭光四千、射光距離は十七哩半である。

元來、檜野崎の海岸は山脚長く海中に突出てゐるが、加ふるに岬脚を環つて亂礁林立し、餘勢海中に延び、さながら大鰐の如き形をなしてゐる。この亂礁中最も巨大なものは船甲羅の一群である。ここには三座の巨礁鼎足をなして海上に横はり、この熊野灘の入口ともいはれる一帯は、晴天平波の日といへども白波に洗はれてゐないことがない。況してや荒天の際には怒濤狂激して轟々雷鳴をなし、

遠くよりこれを望めば飛沫恰も雲霧の如くである。されば、一たび舵を誤らんか、如何なる堅艦巨舶も忽ちこれに觸れて破壊粉碎せらるるを免れず、遂に悲しむべき結果を捲き起すのである。かくて、この附近に於て古來から難破沈没した船舶は枚擧に遑がないほどである。

六

四、エルトグルル號の遭難 (附圖其二)

明治廿三年九月十六日火曜、エルトグルル號は熊野灘に差しかかった。而して、その針路を西南にとつた。その日は朝來曇り勝て風激しく、海もひどく荒模様であつた。やがて、山なす怒濤に揉まれ揉まれた木造艦エルトグルル號は、同日午後すでに進退の自由を失ひ、機關が最大限度の能力をあげたにも拘らず、如何せん風濤に翻弄されてぐんぐんと樫野崎燈臺下の名にし負ふ船甲羅の岩礁へと押され行く外はなかつた。

抑々、この船甲羅と呼ぶ岩礁は數百年以來航海者にとつて貪食飽くなき海魔なのである。艦長以下乗組員全部は死力を盡して荒狂ふ魔神と闘つたが、かかる絶望的な状態にあつてはまた如何ともなす

術もなかつた。

かくて、同夜九時頃、船甲羅の岩礁に乗揚げ、艦體は見る見る中央より兩斷され、殘軀また漸次怒濤に破碎され、遂に十時半頃には全艦悉く覆没してしまつたのである。

嗟呼、かくして樫野崎岩礁深海の藻屑となつたのは、雷にエルトグルル號のみではなかつた。畏くも尊き 明治天皇の聖恩と敬愛する日本國民より示された友情をばこよなき寶物として心の奥に秘めたる土耳其國海軍將士の情熱も希望も今や跡形もなく消失せて、徒らに恨を千載に遺したのである。

この遭難でオスマン提督以下漂溺せる者は五百四十名であつが、その將士の氏名は左の如くである。

特派使節提督	海軍中將	オスマン
艦長	海軍中佐	アリ
副長	〃	ジェミル
二等副長補	〃 少佐	ヌリ
三等副長補	〃	メフメット
四等副長補	〃 一等大尉	ウメル
航海長	〃	タフシン
水雷長	〃	レンシアット
五等副長補	〃	テヅフィック

HP 『海軍砲術学校』 公開史料

機 關 將 校	機 關 副 長	機 關 長	〃	〃	〃	〃	〃	航 海 將 校	航 海 副 長	砲 術 副 長	〃	〃	〃	〃	分 隊 長	砲 術 長	主 計 長
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
機 關 一 等 大 尉	機 關 少 佐	機 關 大 佐	タ フ シ ン	メ フ メ ット	バ ス リ	イ ブ ラ ヒ ム ・ シ エ ヴ キ	シ エ ム テ イ チ ン	ネ ジ ツ ブ	サ フ エ ット	イ ゼ ツ ト	ウ メ ル ・ ル ユ フ	ヌ	フ ル シ ー	ハ ム デ イ	ジ エ ラ ー ル	シ エ マ ル	海 軍 主 計 大 佐
シ エ ヴ キ	ア リ フ	イ ブ ラ ヒ ム															

HP『海軍砲術学校』公開史料

〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	士	陸	軍	軍	造	〃	〃	〃	〃	〃	機
							官	船		醫	船						関
								隊		長	將						將
								士	醫	校							校
								官	官								
						〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	海軍
						〃	少	少	軍	軍	造	〃	〃	〃	中	〃	機関
						〃	尉	尉	醫	醫	船	〃	〃	〃	尉	〃	大尉
							サ	フ	一	大	中				ア		メ
ハ	ア	ア	イ	メ	ア	リ	・	エル	等	尉	ア	カ	サ	ケ	メ	メ	メ
シ	フ	メ	ゼ	フ	サ	ザ	ギ	デ	大	ヤ	ヒ	ド	デ	マ	ット	ット	ット
ム	メ	メ	ツ	メ	フ	ザ	ア	イ	尉	セ	ユ	リ	ク	ル	・	・	・
	ット	ット	ット	ット	ット	ット	ーフ	ーフ	フ	フ	フ	リ	リ	ル	ジ	シ	サ
															エ	エ	イ
															マル	マル	イト

士	海軍少尉	ア	リ
〃	〃	シ	エ
〃	〃	アフメット・ジャ	ミ
〃	〃	アフメット・ジャ	
〃	〃	メフメット・ジャ	
〃	〃	サ	リ
〃	〃	フ	

生存者六十九名、内士官六名は岸邊に泳ぎつき辛うじて岩上に逼ひ上つた。當時の慘憺たる光景は概ね次の如くであつた。

同夜十時頃、風は荒れに荒れ、波は狂ひに狂ひ、徒らに怒濤の咆哮するを聽くのみだつた。折しも榎野崎燈臺へ一外人の闖を排して入り來るものがあつた。やがて、二人また三人、踵を接するもの十名に及んだ。全部蹠踉として足どり重く、加ふるに、赫面ややどす黒く、眼は血走り、悉く身に數傷を被つてゐた。燈臺の看守はその異形の闖入者に早くも事情を察知し、直ちに應急の手當を加へ、且懇に訊ねるところがあつたが、言語は通せず、加ふるに、頭腦が混亂してゐたので、説明を聽取することが困難であつた。やがて、技師瀧澤正淨氏は萬國信號ブツクを示し、これによつて漸く土耳其國軍艦なることを知るを得たのであつた。こゝに於て臺員は直ちに急使を派して變を榎野崎に告げ、區民の來援を待つたのである。

これより曩、榎野崎區民高野友吉氏は同夜九時頃海上に當り一大爆音を聽き、これを燈臺に知らせ

んと駆けつけたが途上前記の如き風體の身に數傷を被り、踉蹌醉へるが如き一異國人と遇つたのであつた。

そこで、彼は直ちにこれを援けて樫野崎に歸り、急を區民に告げて共に手當を加へた。かくて、同夜から朝にかけて辿りついた遭難者の數六十九人を算するに至つた。

さて、これ等の人々の話によつて、エルトグル號は九月十四日横濱を解纜し、熊野灘に到るまでは至極平安な航海を續けたのであつたが、同海上で九月十六日圍らずも荒天に會し、狂暴な怒濤と闘ひ、機關の最大能力を發揮して樫野崎を通過すべく死物狂の努力をなしたのであるが、遂に船甲羅岩礁に乗揚げるに至つた顛末を知つたのである。岩礁に衝突した結果、軍艦に滲入した海水の溫度は著しく昇騰し、機關に觸れて爆發の慘事を惹起し、ために、船軀が粉微塵になつたと言ふわけである。

遭難中、艦長アリ中佐、副長補ヌリ少佐を初め乗組員全部は、いささかも自己の生命の安全に顧慮することなく、最後の一瞬まで各自の任務を死守すべく各々その部署につき、雄々しくも武人らしき最期を遂げたのである。又機關長イブラヒム大佐は偶々汽罐の側にあつたので、その爆發とともに壯烈悲痛なる殉職を遂げたのであつた。

かかる間にあつて、オスマン提督は自若として人事をつくして天命を待つものの如くであつた。而

して、副官再三の進言にも拘らず、自己の生命を完うすることを肯んぜず、従容として艦體とその運命を俱にしたのである。

後に至り漂流品として彼の最後を飾るべき大禮服が発見せられたのであるが、天晴れ武人の覺悟の程も窺はれる。

五、大島村民の義舉

九月十七日朝、大島村長沖周氏變を聞いて馳せ至り、樫野、須江兩區長と協力して生存者の救護に努めた。生存者はこれを夫々大龍寺及び樫野小學校に收容せしめ、大島村村醫小林健齋、伊達一郎、杉下秀諸氏を督して治療に當らしめた。

避難の將卒六十九名中、健全なるもの六名、重傷者九名、他は多く輕傷であつたが、悉く怒濤に揉まれ、岩礁にさいなまれ、全身に數傷を負うてゐた。しかも、着衣悉く剝脱して飢寒と恐怖に戦き生色がなかつた。大島村民は各戸その貯ふるところの甘藷と飼ふところの鶏を提供したのであつた。

村民樫田文右衛門氏は曾て外人某につき洋食の調理を習得してゐたので、専ら司厨の事に當つた。けれども、わづかに小村に過ぎない大島が、俄かに六十九名の珍客に會つて、たちどころに食糧の缺乏に瀕したのは當然のことであつた。

それにも拘らず、同村民はこれ等の珍客のため土耳其人が本國に於てその賓客に示すに劣らぬ接待をなし、その貯ふるところの食糧の一切を國家の名譽のため喜び進んで提供したのであつた。

さて、食に次いで必要なものは衣服であつた。しかるに、土地の不便から來る乏しさは、ここにも多くの困難を來した。村民はまた貯ふところの浴衣を出して、急場の凌ぎとなしたのである。六尺豊かの土耳其の大男が身丈の低い日本人の浴衣を殆んど腰切に纏つてゐる光景は、涙のうちにも滑稽味の禁じ能はざるものがあつた。

次に大島村民は、一方、溺死者を收容するとともに、他方、生存者の第二段、治療のためあらゆる處置をとつた。遺骸を搜索するために全村民は不眠不休の奔走をしたのであるが、中にも最も功勞のあつたものは、沖村長、樫野區長、齋藤半右衛門、須江區長、瀧本彦右衛門、岩谷太郎等諸氏であつた。

かくて近海から二百六十名の死體を收容した。村長は避難者のうちより樂長イスマイル中尉、ハイドル少尉の兩人に役場員及び駐在所巡査を附添はしめ、防長丸に便乗せしめて兵庫縣廳に送つた。

防長丸は折柄大島航海中であつたが、海岸よりの求めにより大島港に入り欣然村長の申込に應じ、事件の實況を具申するため上記の四名を搭載、神戸へ回航したのである。尙ほ防長丸は二名の生存者に衣類その他必需品を與へたのであるが、この到れり盡せりの厚遇こそは、一般日本人の非常時に現はるる美風を如實に物語るものであつて、誠に吾人の敬服し措く能はざるところである。

六、生存者の送還

在神戸獨逸國領事館はこの慘事を聽き、偶々神戸港に定泊中の自國砲艦ウォルフ號のグレドネル艦長に報知するところがあつた。同時に、兵庫縣知事が同館に訪問の際協議の結果、エルトグルル號生存者を神戸へ護送するためウォルフ號を現地に急航せしむることに決定した。かくて、獨逸國領事とウォルフ號艦長は救護に赴くことに快諾したのであるが、これ獨逸國民が海の同志のために、その包藏せる友愛の情を披瀝せるものであつて、茲に深く感謝の意を表するものである。

かくて、ウォルフ號は九月廿日午前七時大島に入港し、負傷者六十五名を搭載して神戸へ回航した。これより曩、ウォルフ號艦長は歸途檜野崎燈臺に一部隊を上陸せしめ、殉職せる土耳其國將士の靈を弔はしめんとしたのであつたが、風波激しきためそれを實現することが出来なかつた。そこで、ウォルフ號軍醫は大島村村醫と協力し自艦に設備せる諸種の醫具を用ひて負傷者に懇切なる治療を施した。且又同艦乗組員一同は傷つける土耳其國戰友のために看護したが、その友情掬すべきものがあつた。

一方、日本帝國海軍大臣に於ても急報に接するや、憂慮措く能はず、直ちに軍艦八重山をして大島に急航せしめた。八重山艦は九月廿一日大島に到着し艦長三浦功海軍大佐は乗組員を上陸せしめ水兵を督して懇ろに葬儀を行ひ、殉難將士の靈のため帝國海軍最後の訣別を行つた。

これより曩、八重山艦長は大島村村民と協力してその收容せし遺骸を檜野崎燈臺附近と、遭難現地船甲羅岩礁の前にある崖上に準備せる墳墓に埋葬したのであつた。それより、殘務整理の任務を帯びて大島村に残留してゐる生存者二名を八重山に收容して神戸へ去つたのである。その結果神戸には避難者全部六十九名集められたわけであるが、これ等の生存者は神戸に於て病院に收容され日本政府よりあらゆる便宜を與へられ、且身體の回復のため、懇切なる手當を受けたのであつた。

軍艦エルトグルル號遭難の報、長くも天聽に達するや明治天皇陛下にはいたく宸襟を惱まし給

ひ、勅して式部官丹羽龍之助、侍醫桂秀馬兩氏を差遣し給ひ、皇后陛下亦看護婦十三名を神戸に派遣して、篤く撫恤を垂れさせ給うた。生存者は天恩の篤きにいたく感激し傷者も苦惱を忘るる程であつた。

間もなく聖意に依り、これ等の生残者を祖國土耳其へ送還し、併せて土耳其國特派使節派遣に謝意を表すべく、比叡艦長田中綱常大佐、金剛艦長日高壯之丞大佐は大命を拜し、土耳其皇帝に對する

ここに於て、比叡艦長田中綱常大佐、金剛艦長日高壯之丞大佐は大命を拜し、土耳其皇帝に對する御親書と御贈品とを奉載し、船路の旅に上つた。

兩艦は明治廿三年十月五日品川灣を發し、神戸港に入つて遭難士卒を分乗せしめ、イスタンブルに向つて航行したのである。かくて、兩艦は同年十二月十八日ポート・サイドを過ぎ、十二月下旬ダネル海峽に到着したのであるが、同海峽を通過するにあたりベシケ港に入り、ここで土耳其軍艦セルヒサル號の來り迎ふるに會した。この時、同軍艦は遭難士卒の引渡を乞うたのであるが、日本軍艦はイスタンブルに同航して直接生存者の引渡を致し度き希望を述べ、これにより土耳其政府より特に海峽を通過の許可を得て出迎の一行とともに明治廿四年一月二日愈々イスタンブルに入港し、茲に比叡、金剛の二艦は土耳其軍艦と伍してドルマ・バフチエ宮殿の前に繫錨したのである。イスタンブルの全市民の喜びは譬へんにもなく、日本國民がエルトグルル號使節一行竝に殉難者に示した熱烈な

る歓迎と、深甚なる同情に對する衷心からの感謝を以てこれを迎へた。

當時の土耳其皇帝アブデュル・ハミット二世はドルマ・パフチェ宮殿を以て日本將士の接待所に充てられ乗組員一同のため、連夜饗宴を催し、特に比叡、金剛の兩艦長に謁を賜はり、メジディエ二等勳章を贈與された。

かくて、兩艦は日本國民に劣らぬ土耳其國民の熱誠なる歡待の裡に滞留すること四十日の後、熱狂せる歡呼の聲に送られてイスタンブル港を辭し、明治廿四年五月十日無事品川灣に歸着したのである。

エルトグルル號乗組諸將士の遺品竝に引上げられたる兵器及び諸品は日本政府より佛國汽船に託され、土耳其本國へ送還された。この品目左の如くであつた。

クルップ大砲	八	門
同彈丸止メ	二	個
アームストロング大砲	四	門
ホッキス速射砲	四	門
同 五連砲	三	門
水 雷 機	二	個
小 銃	一八二	挺

拳銃 二四挺

指揮刀 六一振

銃剣、外國貨幣、勳章その他 七一個

而して、これらの兵器諸品は、大島村橋爪仁藏、横濱山科禮藏、兵庫賀川純一、有田喜一郎、大松藤右衛門の諸氏が海底礁間を探り具さに艱苦を嘗めて漸く引上ぐることを得たものである。

次に、日本の有力なる時事新報社は殉難將士の遺族のために全國より義金を募集した。この義金は明治廿四年同社記者野田正太郎氏これを携へて土耳其國へ出張した。又東京に於て募集したる有志の義金は現日土貿易組合理事山田寅次郎氏亦之を携へ翌明治廿五年我國へ渡航したのであつた。前記兩氏は特に土耳其皇帝アブデュル・ハミット二世より拜謁を賜つた。次いで、土耳其國政府は兩氏を招聘し、青年士官に日本語を教授せしめた。

明治廿六年、アブデュル・ハミット二世は更に侍從武官アフメット少佐を答禮のため日本に遣はし、明治天皇陛下に土耳其産名馬を贈呈して、懇なる謝意を表せしめられた。

七、樞野崎の遺跡（附圖其三）

大島村の貴重なる墳域は、國家のために殉職したる土耳其國將士の墳墓である。

この墳域は樞野崎燈臺東南三百米の地點にあつて、絶海に面し、大島村より樞野崎燈臺に到る途上の崖上にある。この墳域は明治廿三年九月廿一日選定せられたものであつて、其處に碑がある。即ちそれには徳川茂承侯之に『土國軍艦遭難之碑』と題し、尙ほ土耳其國舊文字による土耳其文及び日本文にて『オスマン・パシァ』及び日本文の遭難事件に關する碑文が刻されてゐるが、右は當時の和歌山縣知事石井忠亮氏の選文にかかり、明治廿四年二月建碑されたものである。碑文は左の如くである。

土耳其國軍艦埃耳土虞羅耳遭難之碑

正二位侯爵徳川茂承題額

明治二十三年六月

土耳其國皇帝以其海軍少將阿斯曼巴西亞爲特派公使奉國書而來

皇上見公使於東京宮城授勳章賜享宴禮待殊渥使事既畢陸辭還國九月十六日駕軍艦埃耳土虞羅耳夜過熊野海遇颶風起橋折鐵摧熊野海自古稱絕險多築燈臺標識航路此夜霧雨晦冥咫尺不辨加以艦內機關失其用竟觸暗礁艦遂覆沒公使以下六百五十人皆溺艦長亞犁陪亦死獲免者僅六十九人嗚呼悲慘矣哉其地實爲紀伊東牟婁郡樞野崎角有燈臺守者未覺知遽有被髮徒跣者相踵而來言語不通皆負痍傷技手瀧澤正淨輒與臺員協力扶持給衣藥既而知其爲土國人也黎明大島村長沖周聞變馳至與樞野區長齋藤半之右衛門須江

區長瀧本彦右衛門等周旋甚力與警察署長清水廣治分署長小林征一等商議就安民舍招醫治療民爭任其看護乃飛報於和歌山縣廳縣廳距此四十餘里海陸共阻而電信未全通十八日報始達書記官秋山恕卿兼程赴援郡長赤城維羊先在倉日櫻野地僻不便周給且時疫未熄憊感傷者恐不可救即舟而移之於大島浦以佛寺充病院配付醫師尋發輕刺數十收遺骸於亂礁怒濤間窮搜累日而未見公使屍更察潛人求千海底而終不獲焉他屍皆瘞於燈臺西南原上因定爲兆筮假造公使家於其中央爾餘諸臺環列其側初濱於沿岸各地者亦合瘞于此亡慮二百六十人二十一日八重山艦長海軍大佐三浦功及海軍軍醫大監加賀美光賢率 命而至正裝率隊兵行葬儀恕卿等佐之且存問傷者移置諸其艦又有獨逸國艦來而載之共航于神戸 勅遣式部官丹羽龍之助侍醫桂秀馬優賜撫恤

皇后亦脫被服各一副恩旨深厚 無所不至於是疲瘁困頓重傷瀕死者亦皆起十月特遣比叡金剛二艦送歸之於其本國夫萬里奉死客死不遺其不幸洵不忍言矣雖然 朝廷隆遇弔卹有加公使其亦可瞑也歟當有此事變也上下驚歎自王公至士庶人唁其死慰其病遺金幣布帛者有焉餽藥食物者有焉情誼懇摯不遑記述若夫大島村以其爲所管連出壯丁四百餘人日夜服勞役橫濱人增田萬吉兵庫人賀川純一有田喜一郎神戸人大松藤右衛門與大島村民胥謀請官採聚其沈沒器材器什具錄以進且以所拾遺骨舉柩其墓爲設祭典是皆不啻發思遠人之誠抑亦有深感

皇上至仁符外賓之篤也思亮不肖承乏地方宣揚 德化唯恐其不逮賴書記官以下警察官郡村吏各奔走致職以濟其事已而視其地察其狀寔有不堪痛悼者焉因欲建碑勒其事併表追弔之意聞縣有志之士多贊助之乃敘其便概係以銘銘曰

風伯作威 堅艦不支 使臣雖沒 聘問始斯 勒諸貞石 以表痛悲

紀元二千五百五十一年 明治二十四年二月

和歌山縣知事 從四位勳三等 石井忠亮 撰文
和歌山縣書記官 從六位勳六等 秋山恕卿 書

大島村村民はこの墳墓に詣で、この墓碑を仰ぐ毎に當年の慘事を追懷し、同時にその往時彼等の父兄が、殉難者竝に身に數傷を被り辛くも避難せる生存者の救護に盡した功績を回想しつゝ萬感胸に迫

るものがあつた。誠にこの墳域こそは大島村村民によつて創られたる人類愛の記念物である。

されば村民のこの墳墓を愛護すること深く、常に塋域を洒掃し、守護し、又弔祭に關しても常に意を用ひ、海の勇者の靈を永久に安ぜんがため、半世紀以來十年毎に盛大な祭典を舉行し來つたのである。

第二章 墳域の改修

一、大阪日土貿易協會の企圖

大阪日土貿易協會は日土兩國間の親善を進め、貿易の發展を圖ることを目的として大正十四年十一月組織されたるものである。貴族院議員にして當時大阪商工會議所會頭稻畑勝太郎氏を會長に、又當時の土耳其國代理大使フルシー・ファット氏を名譽會長に推戴した。

この協會には次ぎの有力なる會員が參加してゐる。即ち、森平兵衛、安宅彌吉、山田寅次郎、安住伊三郎氏等であつた。理事長山田寅次郎氏が明治廿五年土耳其國に渡航されたことは前述のごとくであるが、同氏は引續き滯土十八年の長きに及び、土耳其語に精通し現時日本に於ける有數の土耳其通の一人であり、その著述に於ても示さるる如く、最もよき土耳其の理解者である。安住常務理事とともに靈地改修のため東奔西走、最も努力された人である。

日土貿易協會は日土關係を愈々緊密ならしむるために、兩國友好の楔であるエルトグルル號遭難將士の功績を追懷せんとした。茲に於て日本にとつて永久の記念である樫野崎の遺蹟に於て追悼祭を舉行せんとする議が起つたのであるが、計畫成るや同情翕然として集つた。茲に着々諸般の準備を整ふ

ると共に、一方、和歌山縣及び大島村に交渉してその協力を求め、諸事遺漏なく進行することを得たのである。追悼祭舉行に關し金品の寄贈その他積極的援助を與へられし芳名左の如くである。

(順序不同)

大阪商工會議所	江商株式會社	安宅彌吉氏
稻畑勝太郎氏	日本郵船株式會社	大阪商船株式會社
大日本紡績株式會社	東洋紡績株式會社	山科禮藏氏
日本綿花株式會社	東洋綿花株式會社	大阪朝日新聞社
大阪毎日新聞社	森平兵衛氏	山田寅次郎氏
安住伊三郎氏	水谷政次郎氏	日本麥酒礦泉株式會社
石崎株式會社		

二、追悼祭式典

さて準備漸く成り、昭和三年八月五日を卜して追悼祭執行に決するや、大島全島を擧げて空前の緊張を呈した。青年會は總員出動して式場に至る道路を新設し、婦人會は揃ひの衣裳を新調するなど、

島民一同その日の至るを待った。

大島村では、村の入口に大アーチを造り、日土の兩國旗を以てこれを飾つて、歓迎の意を表した。

愈々八月五日の當日になつた。この式典の參列者駐日土耳其國大使フルシー・ファット氏、野手和歌山縣知事、稻垣憲兵隊長、又日土貿易協會側よりの安宅、高柳、安住、山田、稻畑の諸氏は大阪商船那智丸に便乗して同日拂曉大島沖に到着した。

この日、折悪しくも雨風激しくさしもの那智丸も動搖甚しく、端艇に移乗して大島埠頭に達するには極めて危険であつた。それにも拘らず、常日頃荒海をもともせぬ村民の決死的奮闘によつて、辛うじて無事大島に上陸するを得たのである。參列者は村の入口で村民と小學兒童等の出迎を受けた。かうして村民は篠つく雨をももとせず、雄々しくも一行を歓迎したのであつた。

一行は蓮生寺に迎へられた。而して、只管翌日の天候恢復を待つことにした。しかるに、夜に入つて風雨愈々激しきを加へたので、終に式場を同村小學校に移すことに決した。

かくて準備が整つたので、翌六日午後二時追悼祭が舉行された。

式場には正面に祭壇を設け、右列にファット代理大使、野手和歌山縣知事、稻畑祭主、山田副祭主、牛島大阪府知事代理、橋本商工省代表、奥村大阪府商務課長、鈴木大阪市長代理、稻畑憲兵隊長、安宅在大阪土耳其國名譽領事、湯川大阪商工會議所議員總代、最後に追悼祭委員長安住常務理事着席

し、左列には神官十餘名着席、高柳常務理事司會の下に擧式した。

先づ神官の祭詞捧讀あり、右終つて稻畑祭主嚴かに神前に祭文を誦して、殉難將士の英靈を慰むるところがあつた。

茲に日土貿易協會主催の下に追悼祭を執行して、謹みて遭難諸士の英靈を祀ります。吾々は諸士の幽魂が、日土兩國保護の神として、永く兩國の親交を助けんことを祈る次第であります。

次いで土耳其國代理大使フルシー・ファット氏は土耳其語にて弔辭を朗讀し、山田副祭主その譯文を朗讀した。

駐日土耳其共和國代理大使 フルシー・ファット

此地竝此近海に於ける我邦人の英靈に弔辭を捧ぐ。各位は生前國家に貢獻せらるゝ所多く而も死して尙不朽の功績を留めらる。蓋し日土兩國國交を結ぶの基礎は、各位によりて固められたるを以てなり。各位が此地に遭難せられたる當時を追懷せば悲痛の情胸に迫るものありと雖も、然れども各位の致せる功績が、我が土耳其國と日本國との間に永久の親善を齎しむる基礎となりしことは本官の感激惜く能はざる所なり。軍艦遭難當時、各位は義侠と温情とに富める日本人によりて、此地に葬られたるは、不幸中の幸ひなり。各位の故國遠しと雖も、各位は此の情義に満てる國土に於て、永遠に安じて瞑目せらるべきことを信ず。今や各位逝てより茲に三十九年、本日其英靈を弔はるるの美學あり。思ふに各位在天の幽魂は、永久に日土兩國國交の爲めに冥助を垂れ、兩國國交は之に依りて愈々親善を重ねつつあることを感謝するものなり。莫くは享けよ。

かくて、外務大臣、遞信大臣の弔辭代讀、商工大臣、海軍大臣の弔電披露あり、續いて大阪府知

事、和歌山縣知事、大阪市長、山田副祭主、安住委員長、小川大島村長等の弔文の朗讀があつた。

最後に大島小學校兒童總代の可憐なる手によつて玉串が捧げられたのであるが、この時、満場肅として聲なく、感激の極、ひそかに暗涙を呑むものさへあつた。かくて、式は午後四時、靜肅裡に終了したのである。

三、墳域の改修

日土貿易協會は追悼祭終了後、この式典を永久に記念するため檜野崎の墳域に追悼碑を建立せんとし、且十年毎に慰靈祭を舉行することに決定したのであるが、幸ひ、追悼祭參加の大方の財政的援助を得、昭和四年四月五日之が竣工を見たのである。その碑文左の如くである。

明治二十三年九月十六日土耳其帝國軍艦エルトグルル號は特派使節エミン・オスマン・バシア以下六百五十人の士卒を載せて横濱より神戸に向ふ途中熊野沖に於て暴風に遭ひ不幸檜野崎の岩礁に觸れて難破し使節始め五百八十一名の乗員は海中に溺死して英魂を怒濤に委し了んぬ洵に千載の恨事と謂ふべきなり、日土貿易協會は日土兩國の友好日に敦厚を加ふるに際し當時を追憶すること轉た切なるものあり、昭和三年八月五日大島及檜野に於て弔魂祭を執行し土耳其國代理大使フルシー・フアット・ベイ亦之に參列せり乃ち此處に碑を建て殉難諸將士の英靈を弔ひ且本會舉行の弔魂祭を永久に記念すと云爾

昭和四年四月五日

篆額 大谷光瑞書

正六位勳三等

稻畑勝太郎撰

四、聖上陛下の行幸

昭和四年 聖上陛下には和歌山縣地方に御巡幸の砌、明治天皇陛下へ土耳其國より遙かに敬意を表し奉るため派遣され、歸途敢なくも異郷の鬼と化したエルトグルル號殉難將士の墳域に特に行幸あらせられ、長くも 碑前に御擧手の御會釋を賜はつた。

聖恩の優渥外臣に及ぶ。洵に感激の極にして、この畏き行幸こそは靈地の道義的意味をひとり日本國民のみならず、普く全世界に示させ給ひしものにて、之とともに、高潔なる日本國民の祖先崇拜の美風と、その犠牲的精神の發露を如實に物語りしものである。

由來、大島村村民は樫野崎の行幸を記念とする敬虔の念愈々深く、毎年六月三日の吉日を卜して同

村の祭日となして居る。

二八

雄壯なる日本の諸島の中にあり、平和にして淳朴なる大島村に於て舉行さるゝこの榮光ある祭典こそは、人類不滅の愛と日土不朽の親善を確固とするものであつて、同じく亞細亞洲に位し、その西端に生活を營む土耳其國民は、同月同日を心に銘じ、永久に忘却しないであらう。

第三章 弔魂碑の建立

一、土耳其共和國政府の建碑決定

新興土耳其國は現にその偉大なる統率者アタテュルク大統領の指導下に凡ゆる部門にわたり驚異的躍進を遂げつつある折柄とて、國家の功勞者に對する敬慕の念の益々熾烈なるものがある。かかる理由の下に、今より已に半世紀以前日土の親善に貢獻せる人々の勳績を宣揚せしむることを忘却して居るものではなかつた。況してや樞野崎の地は昭和四年、畏くも 聖上陛下同地に玉歩を刻し給ひしより、エルトグルル號殉難者の墳域は今や天下の聖蹟として知られ、すでに、和歌山縣に於てはこの一帯を國際的靈地化せんと計畫し、日本國政府亦この景勝の島嶼を國立公園に指定し之に施設を加へんとしつつあるのである。

茲に於てか、豫ねてより不運なるエルトグルル號の遭難に際して示せる大島村民の義舉と全日本國民の寄せたる翕然たる同情に萬腔の謝意を表し居れる我が土耳其國政府は、聖上陛下の行幸を永く記念し且は日本國民の殉難者の墳墓を愛護し又弔祭に關しても常に意を用ひつつある事情に鑑み、靈地

の改修を行ひ、生きて築ける日土親善を雄々しく死して永劫となせる名譽ある殉難將士のために弔魂碑を建立することに決定したのである。

これより曩、駐日土耳其國代理大使ファット、ネビル兩氏はこれが改修に關し本國政府に種々進言するところがあつたが、去る昭和十一年二月東京へ赴任せる現土耳其國大使ヒュスレヅ・ゲレデ氏の斡旋により、茲に愈々土耳其國政府は新に建碑することに決定し、同時に本國より工事費の送金を見たる次第である。

一、弔魂碑定礎式

駐日土耳其大使ヒュスレヅ・ゲレデ氏は就任するや、天皇陛下へ信任狀捧呈の同日、即ち昭和十一年三月廿三日、明治神宮に正式參拜をなした。而して、同年十月廿日樫野崎へ赴くに先立ち、途上京都へ立寄り、維新の鴻業を成し遂げ給ひし明治天皇の神鎮りませる桃山御陵に額づき、謹んで土耳其國民の敬意を表し奉り、併せて今より四十八年前大帝に使して、遙かに交りを日本帝國に訂する

ため派遣されたるエルトグルル號使節一行の歴史的記念を宣明したのであつた。

抑ふ、この度のエルトグルル號殉難者の展墓は、新に建碑せらるべき現地の下檢分を兼ねたものであつて、式典も定礎式といふ形式で執行されたのである。ヒュスレヅ・グレデ大使はこれのため、同大使館附陸軍武官參謀中佐ルシユテユ・エルデルヒュン中佐及び近江谷通譯官を帶同したが、尙ほ東京より日土協會會長内田定槌氏も行を共にしたのであつた。

大阪日土貿易組合は同大使が樫野崎訪問のため來阪せるを機會に、大使のため盛大な晚餐會を催したのであつたが、席上、主催側代理近東貿易協會會長在大阪土耳其國名譽領事貴族院議員森平兵衛氏と土耳其國大使との間に取交はされたる挨拶は左の如くであつた。

日土貿易組合理事長挨拶

閣下並に各位、

大使閣下には御旅行中極めて御多忙の所を御招待申上げましたにも拘らず本夕は御差繰り御臨席を賜はりましたに誠に有りがたく厚く御禮を申上げます。

我が日土貿易組合は一九三四年日土兩國に交換貿易が實施されました機會に貿易の調整を圖る目的を以て出來たのでありますが、爾來組合關係業者は出来るだけ多くの土耳其物産を買入れ邦品の輸出を圖る事に努力して居ります。

御承知の如く從來土耳其物産は極めて僅か本邦に輸入されて居りましたが、此の協定の御蔭で年々五百萬圓近くの輸入を見るに至りました事は兩國のため誠に御同慶に堪へぬ次第であります。今後我が組合は一層の努力を拂ひ兩國の貿易調整に邁進

すると共に日土親善の増進に盡したいと存じます。どうか大使閣下に於かせられても此の意味におきまして御配慮を賜らん事を御願ひ致します。

本日は本組合の理事長である日本綿花株式会社社長雨郷三郎氏が生憎所用のため上京中でありますので、茲に私が代つて一言御挨拶を申述べた次第であります。

ゲレデ土耳其國大使の挨拶

閣下並に各位、

今日大阪訪問に際し御尊重なる御招きにあつかり厚く御禮申し上げます。特に諸名士有力者をかく多数親しく御紹介いただきましたことは私の最も光榮といたすところで御座います。

日土親善を強化するためのあらゆる努力、これは私に命ぜられた公の任務のいはば第一課なのであります。

併しながら、私はなほそれ以外に、貴國並に勤勉にして果敢なる日本國民に對して私の私かに抱いて居る敬意と欽慕とを加へたいと存じます。

さればこそ、日本の國民的義學、今日まで示された數々の御同情から推して、私の光榮とする使命が、私の期待通り、しかも短日月に達成するであらうことを、私は確信して疑はぬものであります。

申すまでもなく、明日展臺いたす豫定になつてをりますエルトグルル號殉難者の靈地は日土兩國修好の歴史的標であります。幸ひ皆様のお力によりまして明日行はるる管の定礎式、又明春六月頃盛大に舉行さるべき竣工式は兩國の友好を更に意義あらしむるものなることを想ひ、ひそかに私は快心の喜に溢れて居るものであります。

これ偏に皆様の御熱誠による賜物で御座いまして、皆様の御參加こそはこの企を一段と光輝あらしむるものであります。そこに私は無上の喜びを感じるものであります。先程、近東貿易協會會長から身にあまる光榮のお言葉を頂きましたが、まこと

に以て痛み入る次第で御座いまして、私の及ばずながら致しましたことなどは、その昔大阪や和歌山縣の方々が計畫なされた末端を御引受けさせて頂いた役割に過ぎぬのであります。

最近日土貿易關係が益々好轉に向ひつつあることは、まことに同慶に堪へませぬ。

世界の經濟的不況の理由は皆様の御存知の通りであります。ことに農業生産者に及ぼせる影響は最も深刻なものでありまして、この點農業國であるところの我が土耳其國の痛手は激甚なるものがありました。

そこで輸出入の不均衡による貨幣恐慌が現出し、それが結果として我が土耳其國政府といたしましては、外國貿易との調整を保つための、ある種の政策を執らなければならなかつたのも亦やむを得ぬ次第でありました。もとより、かかる状態に置かれて居りますにも拘らず日土貿易の今後一層の増進は、我が政府及び土耳其國民のひとしく心から熱望いたしをりますところでありまして、私としてもこの方面については及ばずながら盡したく思つてをります。

昨年來東京に土耳其貿易局が開かれ、大使館に商務參事官の任命を見ましたのも、かかる理由からでありまして、對土耳其貿易のためには大使館も *Missions* も、貿易組合、會社、關係者のため出来る限りの斡旋をいたすことになつてをります故、宜しく御利用の程願ひ上げます。

茲に盃を擧げ、日土兩國福祉のため、兩國貿易上の中心となり常に不斷の活躍をなしつつある關西商工業界の更に一層の發展を祝福するものであります。

さて、新弔魂碑の建碑に關しては、内務大臣の諒解のもとに和歌山縣廳に委任したのであるが、同縣營繕技師松田茂樹氏が土耳其大使館提示の原案に基き設計に従事したのである。

定礎式には帝國陸軍を代表して當時の和歌山歩兵第六十一聯隊長飯村穰大佐、同聯隊軍管區代表、

和歌山縣知事代理小島社寺兵事課長、松田技師、山田近東貿易協會理事長、松井日土貿易組合理事、齋藤インスタブル日本商品館主事、辻大島村長、同村民及び小學兒童一同で、遭難當時救護に奔走した老翁達が参列したことは式典を一層意義あらしめた。

東京及び大阪方面よりの参列者一行を便乗した大阪商船那智丸は十月廿二日午前八時串本港に到着した。この時、同船は忽ち日土兩國旗を以て飾立てたモーターボートに取圍まれた。當地出迎への船には地元の官廳、民間代表及び辻大島村村長等が乗組んでゐた。

この日天氣晴朗、海上また極めて平穩であつた。町民は埠頭に群り集ひ、熱誠なる歓迎の意を表した。串本港より一行は更に三艘の同航船及び二艘の端艇に分乗し、大島村へ向けて出發し、午前八時半無事同村へ上陸したのであつた。誠に大島村の歓迎は涙ぐましい情景であつた。全村一齊に門戸を開いて一行を迎へ、埠頭より蓮生寺に至るまでの兩側には、今を去る四十七年前、エルトグルル號遭難者の救護に決然として起つた當時の潑刺たる若者だつた老人連、その頼もしき息子達、在郷軍人、消防隊員達は手に手に日土の兩國旗を打振りつつ、萬歳の歡呼裡に一行を迎へたのであつた。埠頭にはまた日土兩國旗を以て裝飾せる大アーチが造られてゐた。一行は同日午後一時まで蓮生寺に憩つたが、同寺に保藏せる遭難當時の遺品を手にしては、轉た懷舊の情に堪へざるものがあつた。かくて、同村民の心からなる饗宴に臨み、やがて、同村に用意せられたる自動車に分乗して榎野崎へ向け

出發したのである。途上須江區にさしかかるや、此處にも約二百名の小學兒童が整列して、聲を限り萬歳を叫んで、グレデ大使を迎へたのである。

かくて、愈々午後二時より靈地に於て墓前祭が執行され、英靈の冥福を祈つた。式後グレデ大使は自ら新しき弔魂碑の最初の礎石を安置し、茲に定礎式を終了したのである。

大島村の全村を擧げての参加下に、恙なく式典を舉行し得たのはアタテュルク・土耳其がかの尊き殉職者の勲業と、その遠き昔より由來する日土兩國の不易の親善とを念慮とせるによるもので、茲に同村民の不斷の懇篤に對し衷心よりの謝意を表するものである。英靈も亦之を知りなば定めし感泣に堪へざるものがあらう。

翌日の新聞紙は擧げてこの意義ある定礎式の模様を報道したのであるが、左に大阪朝日和歌山版その他の記事を摘録して當日の情景の一端を紹介しよう。

南海に薫る日土の感激的交歓

澄切つた蘭秋、一點の雲もなき絶好の日本日和だつた。平和な大島村は喜びの胸をとどろかせながら、土耳其大使ヒュスレ・ゲレデ氏の「我が家」への到着を千秋の思ひで待ちわびた。今日こそ日土親善の晴れの日なのである。

この日、朝八時串本港に於て土耳其大使、ルシュテユ・エルデルヒュン陸軍武官、内田日土協會長、飯村第六十一聯隊長、和歌山縣知事代理小島社寺兵事課長、山田近東貿易協會理事長等の一行は、木野東郡支廳長、辻大島村長、その他の有力者の

出迎をうけ、直ちにランチで満船飾の歓迎船に護られ、大島村へ向つた。遙か彼方大島埠頭に彫刻と繙る日の丸と星に新月の兩國國旗で飾られた大アーチが眺められた。そして、其處には大島の村民、有志、郷軍、消防組員、青年團員が堵列してゐるのだ。

大使一行が上陸すると、突如、沸き返へる「土耳其國萬歳」の叫びが埠頭の一隅から捲き起つた。數百の學童たちが手に手に土耳其國旗を翳し乍ら出迎へたのだ。今日は全村のお祭りなのである。學校はお休みだ。大使は感慙に、これら熱誠な歡迎に應へつつ蓮生寺に入つた。ここは半世紀の昔血まみれに傷つきながらも九死に一生を得た六十九名のエルトグルル號生存者が村民から最初の温い看護をうけた因縁深いお寺なのである。

大使は負傷者に對し治療の勞をとつた伊達一郎醫師の甥串本町淺利久治氏から負傷者の診斷書や多數の參考品をうけた後、遭難當時救援作業に必死の努力を拂つた山本多吉翁初め木元市松、安宅鐵松、山本吉松、楠本伊之助等の古老を招き滿面に喜びを湛へながら彼等の皺のよつた手を勞りながら、しつかりと握つた。そして感極り「これが土耳其國最高の敬意の表現である」と言ひながら、その中の長老山本多吉翁（七十七歳）の手へ接吻をおくり涙さへ浮べる情景に、並び居る者も皆目頭を熱くした。中にはこみあげて來る涙をじつと押へようと俯向く者もあつた。嗚呼、筆では書き盡されないこの場面、この眞情こそ日土親善の表徴ではなからうか。近江谷通譯官は「軍人出身の大使が涙を浮べるなど、私共も長らくの間に初めて見る姿です」と聲もうるませて語つた。それから、ゲレデ大使は意義深いその日を永く記念にするために土耳其國正旗一旗を辻村長に贈つた。

大使一行は正午婦人會接待による純日本料理の招宴に臨み、やがて、自動車を驅つて櫻野崎へ向つた。途上到る所各戸は兩國國旗をかかげて心から大使を迎へた。

櫻野崎の燈臺の休憩室では遭難將士の古い寫眞を見、感慨深く岩谷看守長から凄慘な當時の光景などを聞いた。

かくて同燈臺に小憩後、午後二時より神式による厳肅な墓前祭を執行した。式典は齋主の祝詞にはじまり、ゲレデ大使の黙禱數分の後、官民の代表一同は英靈の冥福を祈った。尚ほこの他大島全村民及び約五百名の同村小學兒童たちも兩手に兩國國旗を手にしながら之れに參列した。

式典が終ると、ゲレデ大使は參列者に一場の挨拶をなし、官民代表及び大島全村民に心からなる感謝の意を表した。そして特に居並ぶ兒童たちに對し「よく師の教へを守り、勉學にいそしみ、祖父さん達の生きた教訓に習つて、日土親善のために盡すよう」と訓話したのである。

墓前祭が済むと、直ちに新弔魂碑の定礎式にうつつた。和歌山縣廳から派遣された營繕技師松出茂樹氏は之に立會つた。

式後、土耳其大使館陸軍武官エルデルヒュン參謀中佐は流暢な日本語で記者團に左の如く語つた。

「好天に恵まれたことは何よりでした。ゲレデ大使は大島村を擧げての熱誠な歡迎に心から感謝してゐます。私からよろしく御禮を申すようにとのことです。建碑竣工の節は又御目にかかりませう。こん度は館員一同で参ります。」

三、弔魂碑の建設工事 (附圖其三)

大島村民は墳域設定のため樫野崎燈臺東南約三百米の地點にある廣場を提供した。その總面積七四六平方米である。(附圖其三参照)

新弔魂碑の様式は土耳其本國の忠魂碑に範り、且海上遭難の意義を表現するため高塔とし、以て遙か熊野灘沖を行交ふ船舶より仰ぎ見得ることを考慮した。

建設の基本工事として先づ共同墓地の各所に埋葬されてゐた遺骨を一纏めにし、之を碑の眞下の一部分を地下に埋めた混凝土造りの納棺に安置することにした。而して高さ一二米二〇程を有する新弔魂碑は本書に掲載せる寫真に見るが如き様式にて納骨堂の上に建設されたものである。

この弔魂碑の底面積は百平方米で、その建築材料は鐵筋混凝土を用ひた。碑の正面に讀まるる題字『土國軍艦遭難之碑』は明治廿四年最初に建碑された一基をそのまま簞込んだものである。弔魂碑正面扉口の上には本書扉のカットにある如き日土親善を象徴する飾りが施されてゐる。墳域の周圍は混凝土の玉垣にて取圍まれ、入口の左右へ曩に日本諸有志の建設にかかる二碑を配置した。

新弔魂碑の設計その他一切に就いては和歌山縣松田營繕技師を煩はし、建設工事は同縣遠藤組に於て之を施工した。茲に本建設のため多大の盡力を賜はりし和歌山縣當局、大島村民及び松田茂樹、遠藤兵藏の二氏に對し深甚の謝意を表するものである。

建設工事は駐日土耳其國大使館の凡ゆる希望を容れ、微細の點に至るまで丹念且見事に竣成を見たのであるが、エルトグルル號殉難將士の建碑工事に示された日本國民の熱意と故人に對する敬虔の念とは誠にこの國の祖先崇拜の美風の標識と言はなければならぬ。

四、弔魂碑除幕式

新弔魂碑除幕式は長くも 聖上陛下樞野崎行幸第八周年記念日に當る六月三日の佳日を卜しこれを舉行することに決定した。同時に大島村民が二年後に執行することにしてゐた遭難五十周年の追悼祭を二年繰上げて同日之を併せて營むことにしたのである。

今回の慰靈祭は和歌山縣當局、大島村、近東貿易協會、日土貿易組合、日土協會の聯合主催の下に行はれ、和歌山縣當局がその祭主となつた。而して新弔魂碑除幕式は土耳其國大使自ら之を司祭した。之等の式典に要する經費は専ら日土貿易組合、近東貿易協會及び大島村役場等に於て負擔した。式典に參列した主なる芳名を擧ぐれば左の通りである。

日土協會總裁高松宮殿下御使・別當海軍少將山内豐中氏、外務大臣代理・外務事務官三浦 和氏、海軍大臣代理・副官海軍中佐柳澤藏之助氏、陸軍大臣代理・第四師團長代理陸軍中佐佐藤參謀、和歌

山聯隊區司令部代理塚本少佐、軍艦大井艦長志摩海軍大佐、同艦乗組士官、同軍艦旗及び陸戦隊員五十名、和歌山縣知事吉永時次氏、總務部長中島知道氏、庶務課長山村盛重氏以下十名、日土協會會長内田定槌氏、同理事海軍中將坂本一氏、駒澤大學教授大久保幸次氏、大阪府知事代理明渡萬次郎氏、近東貿易協會會長森平兵衛氏、同理事長山田寅次郎氏、同理事安住伊三郎、湯川忠三郎、藤井滿彦、同囑託田中正雄、佐藤鐵吉の諸氏、日土貿易組合理事長南郷三郎氏代理八木清太郎氏、同專務理事國松祐次郎氏、同理事松井勳氏、大島村村長辻伊八氏、同助役島崎清左衛門氏、大島小學校長玉井平三郎氏、須江小學校長大島定光氏、櫻野小學校長中村直一氏、櫻野燈臺看守長岩谷直一氏、大島蓮生寺住職堀端瑞應氏、串本町長神田佐七氏その他大島村民竝に近郊近在の參加者無慮五千名。土耳其國大使及び館員一同、在大阪土耳其國名譽領事森平兵衛氏、土耳其國海軍留學生二名竝に指導官海軍少佐寺崎隆治氏。

東京よりの一行は五月卅一日夜同地發、大阪にて同地參列者と合流、大阪商船牟婁丸にて天保山發、六月三日午前五時大島對岸串本港に到着した。

牟婁丸は一般の客船ではあるが、近東貿易協會及び日土貿易組合の盡力により一行のため種々の行届いた設備を施された。殊に同社長初め船長の心づくしによる船員の接待は航海を極めて愉快にした。加ふるに、平穩な海に恵まれた一行は燦然たる星月夜に、和氣藹々、近東と極東の兄弟國の永久

不易な友好的歡談に夜の更けゆくのも知らなかつた。

牟婁丸が串本沖に入つたのは翌朝未明であつた。儀典的な歓迎は之を固く辭退したのではあつたが、一行のために正式の端艇を差向け、官民諸代表が土耳其國大使を出迎へたのであつた。ゲンデ大使はこれら代表の案内の下に、新月と星の土耳其國旗と日章旗との翩翩として翻つてゐる串本港埠頭に上陸した。

其處には日土兩國の小國旗を手に手にしてゐる數百の男女小學兒童、在郷軍人團、國防婦人會員、町民有志が人垣をつくつて一行を一齊に歓迎したのであつた。一行は見事に裝飾された幾つかのアーチをくぐり、出迎へに應へつつ旅館海月に入つた。ここで新聞記者團に面接したり、式典の準備の打合せをしたりなどした。

一行は旅館で朝食を攝りながら、この意義ある日を祝福するために色刷で日土兩國國旗を交叉した「紀伊半島日日」の記念號やその他マルトグルル號の遭難や日土親善の物語を滿載した諸新聞の記事を微笑みながら讀んだ。ここには土耳其人も日本人も無かつた。二つの魂が融合して渾然と一つになつたのである。アタテュルク・土耳其國が極東のかかる僻遠の地でかくも諸氏の溢るる情味に接し得たことは感激に堪へざるところであると共に、又力強さを感じた次第である。

日本帝國海軍はこの除幕式へ參列のため巡洋艦大井を派遣した。同艦は土耳其留學生を便乗せし

め、同日朝まだきエルトグルル號殉難者靈地の間近き樫野沖に投錨した。而して、大使以下館員を案内するため端艇を串本港へ差向け、陸戦隊は之を他の端艇で樫野崎へ上陸させた。

かくて除幕式參列者のうち、土耳其國大使、館員、森大阪名譽領事、及び吉永和歌山縣知事は特に同艇で軍艦大井に答禮のため串本を出發し、他の參列者は別の小舟で直接式場へ赴くことになった。大使一行の便乗せる端艇は午前八時卅分大井に到着した。志摩艦長慰勲に之を迎へ整列せる一隊は最敬禮をなした。艦長は同艦がかかる歴史的任務を與へられたことを喜び、日本語を母國語の如く練れる土耳其海軍留學生はさながら自國の賓客を迎へたる如き心境にて愉悅を禁する能はざるもの如くであつた。尙ほ艦長は挨拶として次の言葉を述べられた。

新興土耳其國はこの歴史的記念を價値あらしめ、且帝國日本へ海軍留學生を派遣し、以て兩國海軍の親密を意圖したことは余も亦大いに共鳴するところである。

かくて、同艦の參觀を了るや再び正式の敬禮をうけて之を辭去した。折しも、大井は十九發の禮砲をもつて土耳其國代表に敬意を表したのである。

太平洋の鎮として威風堂々たる日本帝國海軍の一精銳たる巡洋艦大井の灰色に映ゆる巨砲が殷々として轟く刹那、濛々として渦巻く砲煙の裡に檣頭高く翩翩として翻り紅に輝く新月と星の我が土耳其國旗を仰ぎ見る時、誠に感慨無量のものであつたのである。蒼空いや高く國旗と共に輝く名譽を思は

ば土耳其國民は、我が指導者アタテルク大統領と我等が政府に對して歡喜の涙を禁じ得ないであらう。

大使一行が式場に到る順路である榎野崎埠頭へ近づくと、數多の輕舸が忽ち一行の端艇を包圍してしまつた。もしこの時、日土兩國の國旗が同時に翩翻として翻り居るのに氣付かなかつたら、而して又到る所、「土耳其國萬歲」の歡呼の嵐を耳にしなかつたら、これは日本國民だけの國祭日であると思つたに違ひない。

土耳其大使一行と和歌山縣知事とを乗せた艇が榎野崎へ到着すると、ここには官民諸團體、和歌山縣當局及び大島村役場役員が一行の上陸を出迎へてゐた。棧橋から弔魂碑までは約十五分を要する道程であるが、道の兩側は手に手に日土兩國旗を打振つてゐる男女小學生、國防婦人會員、在郷軍人會員、青年團員等で埋まつてゐた。その前を墓前に參拜するため近郊近在から參集した人々は、蜿蜒と行列を作りアーチを潜りながら行進するのであつた。大使一行が豫定通り式場に着いたのは午前十時であつた。待ち焦れてゐた參列者たちはわつとどよめき拍手を以て迎へた。グレデ大使は新弔魂碑前の天幕内に豫ねて設けられてあつた場所へ着席した。この時、軍艦大井の陸戦隊は嚴かに土耳其國代表に敬禮したのである。

新弔魂碑はいとも神々しく純白な布で掩はれてゐた。而して、祭壇には各方面から贈られた花輪が

所狭きまで飾られてゐた。紺碧の空、風もなき絶好日和、さながら自然までもこの莊嚴なる除幕式に参加するかの如くであつた。

新弔魂碑は現代的に新土耳其の様式を表現して建築されたもので、之を仰ぎ見る参列者にそぞろ崇敬の念を興へた。

土耳其國大使は碑前に進み、暫し黙禱を捧げし後、さつと紐を引いて鮮かに除幕すれば白亜の塔は初夏の陽に燦然と輝いた。茲に嚴かな除幕式が開始されたのである。やがて、同大使の一場の挨拶が済むと、次に祝電が紹介された。かくて、除幕式の式典が終るや、引續き神式による慰靈祭が舉行され、左の諸代表の祭文祭詞が碑前に朗讀された。やがて、それが済むと、高松宮殿下御使山内別當、ゲレデ大使、官民諸代表、大井艦長、土耳其陸軍武官は恭しく靈前に玉串を捧げて嚴肅の裡に式典を終了したのである。

この式典の最も感激的な場面は大井艦長が玉串を靈前に捧げたときであつた。新しき弔魂碑の前に恭しく額づくを合圖にいと静かに艦旗は下され、陸戦隊は最敬禮をなした。この時、喇叭は日本戦死者の爲の追悼曲を蕭々として奏し初めたのであつた。

祖國を遙々と離れ來て、闇の夜怒濤うづまく無情の海の藻屑と果なく消えたエルトグルル號殉職者の靈も、定めし地下にて四十八年を経し今日の事どもを知つて感涙に咽ぶことであらうと思はざるを

得ない。尙ほ又彼等の犠牲者に敬意を惜まなかつた日本帝國海軍に萬腔の感謝を捧げたいと思つたに違ひない。この時日本人と土耳其人の別なく肅然と居竝ぶ來賓が同じ感じに打たれたであらう、暫しは寂として聲なき光景を呈したのである。

以下、土耳其國大使の挨拶を初め、除幕式竝に慰靈祭に於ける祝電及び祭文の主なるものを録して永久の記念としよう。

土耳其國大使の挨拶

閣下竝に各位、

明治時代に生を享けたる皆様、未來を背負つて立つ小學生諸君、

今より八年前、昭和四年六月三日、畏くも 聖上陛下がこの榮域に行幸遊ばされし今日この日、親善深き日本の土地に眠れる殉難者の英靈を想ひ起し、悲壯なる死を遂げたるエルトグルル號殉難者を回想し、茲に意義深き記念を更に新しく之を偲ばせるところのこの弔魂碑の前に祭典を嚴修することは洵に感激に堪へぬ次第であります。

まことに殷文殷武なる 明治天皇の御代こそは日本の國威が世界に發揚された時でありまして、かかる輝かしき御代に際し、土耳其國は遙か彼方よりその使節を派遣したことは正にこれこの國が日本に對して包藏せる敬意の念と親善の態度を如實に表明したものに他ならないのであります。

國力充實せる大統領アタテュルクの現代土耳其が日本に對する親善の念は、昔日と少しも變らないのであります。こはエルトグルル號殉難者の碑を建設し殉難將士の英靈を祀るとともに、日本國民が示された誠に深厚なる友情と理解とに對して常に感謝の念を捧げて居ることに徹しても知らるることであると存じます。これを思ふ時、私共はまことに感慨無量であります。

金色の日出づる大海原より、まざまざと眺めらるる日土兩國の親善を象徴するこの尊くも麗しき記念碑こそは、貴地和歌山縣廳當局、松田營繕技師、遠藤兵藏氏等の勳を示せるものであつて、洵に日本國民の祖先崇拜の美風、義俠心、竝に獻身犠牲の尊き發露の成果であつて、これに對し私は萬脛の謝意を表するものであります。

畏くも日土協會總裁 高松宮殿下には御使を御派遣遊ばされました。更に外務省、陸海軍當局、和歌山縣廳、大島村、大阪近東貿易協會、日土貿易組合、竝に東京日土協會がこの擧に對し多大なる御同情を寄せられましたことは衷心より感謝いたすところでありますが、更に日本の將來を背負ふところの小學生諸君がこの式典に参加されたといふことは、涙ぐましくも微笑しき事として、私共は永く永く忘るることの出来ないところであります。

これこそは全日本國民が我が土耳其國民に對して示されたところの無上の敬愛を表したものであつて、正に華々しく金玉の文字で書かるべき歴史的記録であらねばなりません。

當時遭難事件に際し 聖意により派遣されたる八重山艦によつて最初の祭典は嚴修され、生存者は金剛、比叡の兩艦によつて遙々土耳其へ送還されたのであります。而して、今又この式典が軍艦大井によつて嚴かに營まれます。これこそは、貴國海軍が我が土耳其海軍に寄せられたる深き好意を示せるものであります、私は茲に感謝の意を表すべき言葉を知らぬ次第であります。

この心よりの式典の前に私は無上の喜びと無限の感謝とを持つものであります、謹んで厚く御禮いたす次第であります。希くは、エルトグル號殉難者の英靈が日土兩國相互の楔となり、その友好の永遠の守護となり、兩國の福祉と發展のみならず、互に相携へて世界の和平増進に邁進することを望んでやまない次第であります。

除幕式に關し、參謀總長 閑院宮殿下より長くも左の御祝電を賜はつた。

記念碑除幕式の開催に對し謹んで敬意を表す。

尙ほ祝電及び慰靈祭祭文左の如くである。

陸軍大臣 杉 山 元

盛大なるエルトグルル號建碑除幕式に際し謹んで殉難將士の英靈を弔ひ深甚なる敬意を表す。

外務大臣 佐 藤 尙 武

昭和四年長くも 天皇陛下大阪神戸行幸の砌六月三日樫野崎に於ける土耳其國軍艦エルトグルル號遭難者記念碑へ御立寄あらせられ、殉難將士の遺蹟を戀はせられたる記念日に當り、茲に勇士五百四十名の英靈を弔はんが爲新に弔魂碑建設の工成り日土協會總裁 高松宮殿下に於かせられては特に御使を差遣はされ、土耳其大使ケレデ閣下親しく臨席の下に除幕の盛典を擧げ將士慰靈の式祭を行はる。

回顧すれば明治二十三年土耳其政府が遠くエルトグルル號を帝國に派したるは日土兩國交驩の嚆矢にして、幾百の將士悲しくも難に此の處に殉じて以來正に五十年に垂んとす。

惟ふに兩國は亞細亞の東西に位し國運隆々として興り、國交愈々敦厚を加ふ。今僅に最近の事例を擧ぐるも、客年土耳其國海峽制度に關する條約改訂の議起るや、帝國は常に土耳其國の正當なる主張を支持し、同年七月二十日右條約の調印を見たのみならず、近く第二次日土貿易協定も交渉妥結の運に在り、更に兩國相携へて洋の東西に重きを加へ、世界の平和、人類の福祉に貢獻せんことは亦以て往年兩國の歴史的交驩に當り、身を以て親交の礎となりたる殉難將士の英靈に酬ゆる所以なり。

勇士天に歸して歳久しく星霜移り人去ると雖も、大島村民諸子相傳へて祭祀を斷たざりしが、本日碑石新に成り、壯烈な

る殉難の事蹟を追懐し、遠く母國を距つて我か國土に留まれる勇士の英魂を永へに此の處に祀る。在天の英靈莫は來り餐けよ。

海軍大臣 米 内 光 政

茲に土耳其軍艦エルトグルル號遭難四十八年を迎へ、新に土耳其國政府の企畫に依る殉難者記念碑建設の工成り、本日佳辰を卜して其の除幕式を舉行せらる。

今は既に半世紀の昔遠く我が國に使用して修好の使命を果し歸國途上に於て武運拙くも遭難殉職せる將士の英靈に對しては坐ろに往時を追懐して哀悼に堪へざるものあり。

然りと雖も、エルトグルル號の遭難は圖らずも日土兩國民の眞情を相觸接せしめ、兩國を精神的に結合するの契機となり、爾來國交倍々敦厚を加へ竟に今日に及べり。即ちエルトグルル號來邦の使命は實に殉難者の遺烈によりて彌々大なる果を結びたりと云ふべし。

新興土耳其政府は夙に殉難者の偉勳を偲び、自ら建碑を企圖する所あり、我が國の朝野亦進んで之に協力し茲に今日の盛儀を見るの運びとなれり。洵に慶賀に堪へざる所なり。

惟ふに慰靈の途は一に其の遺志を紹述するにあり。本記念碑の建設を期とし、更に益々日土兩國間の親善關係増進を希ひ、一言以て式辭となす。

和歌山縣知事 吉 永 時 次

明治二十三年土耳其皇帝は遙に交を我か國に訂せむとし、海軍少將エミン・オスマン・パシアを特派して修好の意を致さむ。當時我か國は新に一友邦を得たるを喜び上下款待措かず。一行は恙なく使命を果して歸途に上りしが、偶々熊野灘に於て

暴風雨に遇ひ、乗艦エルトグルル號は機關を損して進退の自由を失ひ、遂に櫻野燈臺下の岩礁に乗揚げて忽ち粉碎せられ、全員擧げて海中に漂溺し、一行六百五十名中僅に身を以て免れたるもの六十九名に過ぎず。

悲報本縣に達するや、直に吏員を派して生存者の救護屍體の搜索收容に努め、當時櫻野を始め沿岸の村民は男女老幼擧げて之を協援し、萬難を冒して全力を盡したる義侠博愛は長く美談として傳ふる所なり。此くて苦心の餘收め得たる遺骸は其の數二百六十之を燈臺附近の廣場に合葬し碑を建て石に勒し祭典を修めて厚く英靈を慰弔せり。

爾來春風秋雨四十有八年櫻野崎の怒濤は今尙韙々として當年の響を傳ふるも悲しい哉人は逝きて歸らず、唯見る墓標は茫然として絶海を俯瞰し千古の恨を傳ふるのみ。

土國政府は深く之を遺憾とし巨資を投して墳墓を改修し記念の高塔を建設せしめ、塋域は此に面目を一新し清淨森嚴人をして自ら首を垂れしむ。

謹んで按ずるに、昭和四年 今上陛下本縣行幸の際 畏くも碑前に當時を偲ひ給ひて御擧手の御會釋を賜はり、聖恩枯骨に及び地下に眠れる英靈をして空前の光榮に感泣せしめ給ひたり。本日此の行幸記念日を卜し竣成式を兼ねて遭難五十周年祭を執行せらるるに方り、當時を追想すれば萬感交々胸に迫りて涕泗の滂沱たるを覺ゆ。

由來本邦に於ける外人の墳塋は其の數乏しからず。然りと雖も、一天萬乘の我か大君より 畏くも御會釋を拜するの光榮に浴せしは唯當臺所あるのみ。

今や日土兩國は修好條約を締結して友好致陸日に篤きを加ふるは諸士其の基を開く所、功業偉績は千古に盡きず。英靈知るあらば又以て瞑すべきなり。

本日の盛典に臨み、恭しく一辭を靈前に捧げて深く慰弔の微忱を表す。 英靈尙くは髮髯として來り襲けよ。

和歌山聯隊區司令官
陸軍歩兵大佐

田村透

本日茲に 天皇陛下御臨幸記念の佳晨を卜し土耳其軍艦エルトグルル號殉難將士の追悼記念碑の除幕式竝に追悼會を舉行せらるるに當り、小官亦此の盛典に蒞み祭詞を捧げ得るは無上の光榮とする所なり。

惟ふに海行かば水つく屍、山行かば草蒸す屍は武人の本懐なりと雖も、未だ春秋に富む身を以て異國の海に不慮の遭難を受けられ誠に同情に堪へざるものあり、然れ共閣下竝に諸士の靈は我が日本人によりて及ばず乍ら懸に弔問せらる。言語習慣等相異ると雖も、其の誠心は必ず相通するものあるべし。

爾來幾星霜茲に貴國政府に因りて追悼記念碑の建立成り、大使閣下御臨席の下に盛大なる追悼會を催され、諸士餘榮ありと云ふべし。加之日土の親善は之を楔機として愈々固く、厚く、且は世界和平の柱として永遠に光彩を放つものなり、諸士又以て限すべきなり。聊か蕪辭を述へて祭詞となす。英靈髣髴として來り享けよ。

大島村長 辻 伊 八

友邦土耳其國よりの修好使節一行この地に遭難してより年を重ねること早くも四十有七當時を追憶すれば今尙新なるものを覺ゆ。不幸にして異國の土と化したる英靈空しからず其の尊き犠牲は遂に日土親善の礎をたすに至れり。

過ぐる昭和四年には異くも 聖上陛下この地に玉歩の跡を印させ給へる聖跡とはなり、今其の光榮ある行幸記念の佳き日を卜して茲に異くも 高松宮家より御使を差遣はされ、土耳其大使竝に朝野の貴顯相集ひて新裝なれる遭難將士追悼碑の除幕式を擧げ盛大なる慰靈祭行はる。地下の英靈この國際的盛儀に感泣せんこと信じて疑はず。偶々縁ありてこの盛典を本村に有つに至りたる村人の感激亦之に加ふるものなし。不肖村人の一人としてこの盛儀に列することを得、莊麗なる追悼碑を眼のあたりにして英靈を慰む。悲しみの中に湧く歡喜の情、そぞろ祭し難きものあり。

則ち蕪文を奠して以て祭辭とす。尙くは饗けよ。

日土協會會長 内 田 定 槌

私は本日此の墓地に於て軍艦エルトグルル號遭難者の弔魂碑除幕式竝に慰靈祭が舉行せらるるに當り、土耳其國特派使節オスマン・パシア閣下及び其の御一行各位の英靈に對し謹んで一言申上げます。

去る明治二十三年中閣下の御一行が當地近海に於て御遭難の際には我が國民は上下擧つて其の御不幸を悲しみ衷心より御氣の毒に思ひました。

畏れ多くも我が 天皇后兩陛下にはいたく宸襟を惱まし給ひ侍醫看護婦を派遣され負傷者の手當を命じ給ひたるのみならず遭難生存士卒には夫と被服を下賜せられ又當時大島村民の義學により幸ひにして救助せられたる六十九名の乗組員は我が政府より金剛、比叡の兩軍艦を派遣し之を本國に送還致しました處、貴國民は朝野の區別なく非常に我が好意を感謝され茲に日土兩國親交の端緒が開かれました。されば閣下の御一行は御遭難の不幸により却て本來の使命を全うされた次第でありますから、私は茲に兩國民の親善を目的とする我が協會を代表し、遭難死亡者御一同に對し深厚なる追悼の意を表すると共に、其の御功績に對し篤く御禮を申上げます。

近東貿易協會會長 森 平 兵 衛
土耳其國名譽領事

嘗て昭和四年長くも 聖上陛下當所に御臨幸あらせられし佳辰を卜し薫風徐に吹く本日、茲に土耳其共和國政府の建設にたるエルトグルル號追悼碑除幕式竝に慰靈祭を行ひ以て遭難諸士の英魂を招き弔ふ。

回顧すれば、明治二十三年九月諸士は日土兩國親善の爲め萬里の波濤を越えて來朝せられ、熱誠なる我が朝野の歡呼裡に使命を完うし、其の歸途不幸にも颶風狂瀾の襲ふ處となり、遂に難波し艦とその運命を俱にせらる。噫何ぞ千載の痛恨事ならざ

らんや。

五二

此の意外の樞事に會し驚神動魂併も翕然として注がれし我が邦人の深甚なる同情の念は今も尙ほ毫も變る處なし。

爾來四十八星霜青山碧波舊に依つて存すれど併も兩國の關係は年と共に親善を加へ、通商貿易日に月に股脈を増す、これ蓋し在天諸士の加護に恃つ處渺しとせず。我々は兩國の親交貿易の益と向上進展ならしむることを以て英靈に酬ゆるの途たるを信じ、禮拜咫尺轉た追憶思慕の情に堪へざるものあり。茲に駐日土耳其國全權大使を初め、和歌山縣其間關係官民各位の來臨を仰ぎ、本島島民諸氏の熱誠なる盡力の下に清酌庶羞以て慰靈祭の式典を舉行す。英靈莫くは吾人の至情の存する處を饗け、將來倍々兩國の親善貿易の發展に冥助を垂れられんことを。

日土貿易組合理事長 南 郷 三 郎

明治二十三年九月十六日土耳其軍艦エルトグルル號が當地に於て不幸遭難してより星霜を重ねること茲に四十有八年、而して我が帝國と土耳其國の友好益々敦厚を加へ兩國の貿易も亦緊密の關係にある現状を見るに至り感慨轉た切なるものあり、希くはエルトグルル號の英靈永へに日土兩國の福祉を護り、兩國の親善を助けむことを。

本日和歌山縣を初め關係團體主催の下に土耳其政府の建設せられたるエルトグルル號追悼碑の除幕式に當り一言所感を述べて恭しく追悼の意を表す。

和歌山縣新聞記者協會代表 榎 本 清

當時、我國では、異國人に對する知識が乏しかつたにも拘らず、素朴な村人は純な氣持で、その心境を目で問ひ、手で知らせ、全力を盡して難關な卷繪畫のリリーフを繰り擴げたのであります。不幸にして尊い使命の勇士五百八十有餘を遂に海底深く不歸ならしめたのであります。鬼神すら慟笑する悲惨なこの遭難は日土兩國親善の礎石となつたのであります。當時大島村

を中心付近村落は交通の不便も通信機關の不完備も度外して暮らに救援整備の突に燃え盛つたのであります。噫夢の様な物語であります。五百有餘の英靈に對し唯不幸の言葉で盡きるとしても、英靈は決して幽界を彷徨して居ないでせう。唯今の國際狀勢から見ましても、日土間の貿易に親善外交に決して他國の豫斷を許されぬ緊密性を誇つてをります。去りし日の夜に五百有餘の尊い犠牲者がもし無かつたとすれば、夫れは一時的の倖ひであります。今日の如く、日土間に大きな國際的親善を見なかつた事と思はれます。此の兩國親善の人柱となつた尊い犠牲者は地下三尺で微笑んで自己の死を尊い使命に代へた喜びを放つてゐるであらませう。

この他、慰靈祭に對しては松崎大阪海軍監督長、横須賀海軍砲術學校長、同通信學校長、同水雷學校長、陸軍大學飯村少將、奥村大阪毎日新聞社長、弓削商船學校長(當時郡長)、小西海軍少佐等の諸氏の弔電があつた。

尙ほ 高松宮、閑院宮、伏見宮三殿下を初め奉り花環を御下賜、又は贈呈せられし諸氏の御芳名左の如くである。

高松宮殿下、閑院參謀總長宮殿下、伏見軍令部長宮殿下、佐藤外務大臣閣下、米内海軍大臣閣下、杉山陸軍大臣閣下、第四師團長代理、志摩大井艦長、吉永和歌山縣知事、辻大島村村長、近東貿易協會、日土貿易組合、日土協會、在郷軍人東牟婁郡聯合會、森土耳其國大阪名譽領事、土耳其國大使。この式典が濟むと、大島村は參列者のため檜野崎燈臺前で餅投を催した。群集の歡喜を目のあたり眺めしグレデ大使と吉永知事は思はず櫓に駆け登つて投餅に打興すれば、身動きもならぬ參集者は歡

聲を擧げ感激しながら之を争ひ拾つたのも微笑ましい光景であつた。やがて、燈臺前芝生に設けられた大天幕の中に於て日土貿易組合その他の催による大饗宴が張られた。出席せる來賓大使一行初め數百名。茲では一切を儀禮抜きにした、その名の示すが如き大野宴であつた。この日、早朝から盛典に奔走せし人々のこの國民的、歴史的行事に相結ばれた打解けた和氣靄々の情景は到底筆紙に盡さるべくもない。その饗應も亦僻陬の地にも拘らず到れり盡せりで、來賓は滿喫した。殊に日土兩國旗を色彩鮮かに配合した調理等に到つてはその心づくしに讚嘆せざるを得なかつた。

吉永和歌山縣知事の歡迎の辭に次いで、ゲレンデ大使は來賓各位一同に對し、祖國の名の下に、駐日土耳其大使館の名の下に、又、大使個人として衷心よりの感激の謝辭を述べた。而して、特にその日の除幕式に參列して海の戦友エルトグルル號の殉難者の靈を懇に慰められたる帝國軍艦大井艦長以下乗組員の健康のため盃を擧げた。

次にエルトグルル號遭難者のため義金を携へ土耳其へ渡航し、引續き本國青年士官に日本語を教授せる近東貿易協理理事長山田寅次郎氏は感慨深い同號の遭難を述懐し、左の意味の挨拶をなした。

遭難せし人々の遺骸を廣き海面より集め之を櫻野崎に埋め、こゝに有志者により遭難碑が建てられ、題字は徳川茂承侯が揮毫されました。爾來十年毎に大島村の人々によつて弔魂祭を行ひ、其の冥福を祈られてゐたのです。

處が昭和三年土耳其第一回の代理大使フアット氏が來朝の時、私共の關係して居ります近東貿易協會の人々が同代理大使を

遭難地に案内し、大祭典を舉行致しましたところ、代理大使には感慨無量で本國へ其の弔魂碑建設の議を申し送られましたがこの度現東京駐在ゲレデ大使の御盡力にて土耳其政府よりの弔魂碑成り、本日盛大に其の除幕式を舉行されました事は私にとつても亦懷舊の情に堪へない次第です。

ここに遭難者五百四十名の英靈の冥福を祈ると共に、日土親善のいよいよ濃かならんことを希ひ、且つ大島村の方々が同難遭難當時救護の義侠心と爾來不斷の御懇篤に對し無限の感謝の辭を送つて今日の御挨拶と致します。

又、昨年我が土耳其に文化使節として派遣され、その際、アタテュルク大統領の總裁する土耳其語學會第三同大會に参加した日本に於ける土耳其文化史の權威、新興土耳其の最もよき理解者、且土耳其語の大家である駒澤大學教授大久保幸次氏は左の如く新興土耳其を紹介した。

現代世界に於いて最も顯著なる國際情勢は亞細亞の覺醒と復興であると思ひます。明治維新以來我が日本の目覺しい發展と躍進とは全亞細亞民族を覺醒に驅起せしめ、ついで土耳其の更生と強化とは東方諸民族を緊張せしめたのであります。かくしてここに復興亞細亞時代來し、我が日本帝國はまさにその東方の柱、土耳其共和國はその西方の柱ともいふべき情勢にあります。

私は昨年三月新興土耳其の視察と日本紹介との使命を帯び文化使節としてかの地へ派遣されたのでありますが、土耳其國民が發刺たる元氣と輝かしき希望とをもつて奮闘努力を續け、その甲斐あつて短日月に長足の進歩を遂げ得たることを目撃して心強く感じた次第であります。私の見ますところによりますれば、土耳其國民は誠に親日的でありまして、日本を敬愛するの念が深くあります。私は當時官民より受けた厚意と友情とを忘れることは出来ません。なほ國民性、道徳、言語、風俗等、彼

我相通するもの少からざることも愉快に感じたのであります。

今より凡そ五十年前エルトグルル號遭難事件に關して我が國民が土耳其人に示した厚い友情は今なほかの國人の胸に貴い思い出として生きてをります。今ここに一、二の例をひいてお話致しませう。

先づ第一には昨年五月土耳其の都アンカラで當時の使節エミン・オスマン少將の令孫にあたる婦人にお會ひしたことであります。この方は當地日本大使館の直ぐ近くに住み、内務省に勤めて大いに働いて居られました。私はこの方と當時のことどもを話合ひましたが誠に感慨無量のものがありません。日本國民に感謝の意を傳へてくれるやうにとのことでありましたが、私も種々お世話になつて喜んで居る次第であります。

次はブルサへの旅行の途上船中の出來事であります。ブルサといへば土耳其の最初の首府となつた所で、わが奈良にも比すべき歴史的に由緒の深い緑濃き都であります。忘れもせぬ七月四日土曜日のこと、私はその名もブルサ號といふ土耳其の汽船に乗つてイスタンブルを出發しました。船客の土耳其人はかねて新聞などで私を知つてゐたのでありませう、いつの間にか私の周圍をとり巻いて四方山の話をはじめるのでした。するとこの中の一人の老紳士が私に向つて、貴國の金剛、比叡の兩艦がエルトグルル號の生存者をイスタンブルへ送り届けて下さつたとき、私は學生でありましたというて、當時少年の自分が目撃した最初の日土親善の光景の思ひ出をいかにも懐しさうに物語つては、日本の義侠心に心からの感謝を述べたのでした。この老翁の感激的な物語が一同に深い感銘を與へたのはいふまでもありません。御蔭で私共は至極愉快な船路を續けることが出来たのであります。

さて、私は土耳其滞在中かうした氣持の良い出來事に遭ふ毎に、大島村民諸君の功績を思ふで歡喜と誇りとに胸の高鳴りを禁じ得なかつたのであります。誠に諸君は國家のために大いなる御奉公をなされたのであります。この僻遠の小島において、五十年來常に變らざる博愛の精神をもち、見も知らぬ異國の殉難者の供養をば黙々として爲されたのであります。この陰徳

この誠意、この親切、この獻身犠牲、この包容力こそは實に日本道徳性の發輝に外なりません。かくして諸君の崇高にして偉大なる日本精神を廣く海外に昂揚されたのであります。しかも諸君は沈黙の中に千萬の宣傳にもまさる見事なる外交をなし遂げられました。而して諸君は遂に報ひられたのであります。この貴く佳き日を期して、日土兩國親善の永久の基礎たるべきエルトグルル號弔魂碑の除幕式が兩國民の面前において、土耳其國大使ヒュスレヴ・ゲレデ閣下によつて厳にも華々しく舉行されたからであります。これによつてこの一小島の行爲は重要な歴史的事件として世界に喧傳せらるるであります。

私は土耳其滞在中各所で日本紹介のための土耳其語講演を致しましたが、ある時聴衆に向つて『我が日本國の標識は日であり、貴國のそれは月である。この「日」の側に「月」を添へれば「明」といふ字になる。故にもし日と月とが、即ち日土兩國が提携して正義と平和とのために精進すれば必ずや世界は明るくなるであらう』と申しますと、土耳其人の拍手喝采は暫し止まなかつたのであります。而して私は今この私の言葉が決して空想ではなかつたことを發見しました。御覽なさい。この大島はいふまでもなく、附近の津々浦々、到る所に日章旗と新月旗とが相並んで、晴れ渡つた青空に翩翻として舞りつ、あたり一面に輝かしくもなやかな光を撒布して居るではありませんか。この明朗なる光景こそ兩國民の心と心とをびつたり結びつける象徴でなくてなんでありませう。これこそは取りも直さず土耳其殉難者の貴き犠牲の記念であると共に、諸君の變らざる衷心よりの奉仕の賜物であります。而して將來の任務はこの頼しき雰囲気に乗まれて來て、今日の祭典に参加された諸君の子弟たる小學生諸君によつて果され、その成果愈々大なるべきことを確信する次第であります。

大久保教授の挨拶終るや、和歌山縣縣會議員毛利清雅氏は突如立ち上つて感激にあふれたる一場の演説を試みたのである。氏は日土兩國民の共通の國民性を擧げ、如何にその卓越性が全世界賞讃の的となつてゐるかを指摘し『かかるが故に、吾人の大土耳其國を敬愛する所以も亦そこに在り』と結べ

ば、「土耳其國萬歲」の叫び滿場搖るぐが如くであつた。

かくて午餐後、ゲレデ大使初め館員一同は天幕の側に整列してゐた數百の小學兒童にお土産の菓子袋を手づから配つた。軍艦大井の乗組水兵も亦彼等の不運なる戦友の冥福を祈らんがため、彼等の茶菓を艦より持ち運び、この意義ある式典に參列せるとけなき日本小國民に提供したのである。森大阪土耳其名譽領事亦記念手帖を兒童等に頒ち與へた。和かな裡にも亦涙ぐまじき場面であつた。

土耳其大使館は今回の除幕式の記念として銅製のメダルを造りたる外、新弔魂碑及びエルトグルル號繪葉書を複製し、之等を當日の來賓、關係者及び軍艦大井艦長、乗組員各位に贈呈するところあつた。殊に記念章は各位より非常な好感を以て迎へられ、同日參列者が各自之を佩用せる様は、同記章の心臓ともいふべき日土の兩國旗が胸間に映え輝き、さながら、兩國の親善を表徴する如き感があつた。

かくて、諸事滞りなく終了し、意義ある六月三日もやがて薄暮迫らんとする時、恰も大島村にさしかかつた汽船に乗れる一行を遙かに眺めようとして岸邊に集ふ大島村村民、さては小學兒童まで手に日土の兩國旗をうち振りうち振り、うちあぐる花火の轟を再會の徴と看做しつつ、我が土耳其國に對して示された親善への最高の意志表示に接しては嬉しさと誇に心も酔ふばかりであつた。

折も折、遙か對岸より聞えて來た「大土耳其萬歲」の叫びは汽船の一行の一齊に唱ふる「大日本帝

「國萬歳」の聲に相和して天地も轟くばかりであつた。まこと、汽船のサイレンまでも、さながら歡喜に高鳴る如くであつた。

(於東京 昭和十二年六月記)

東京市牛込區市ヶ谷左内町三十七番地
海外印刷所
印刷人 杉山太四郎